

# 歴史を語る建物たち

庄内編  
(第16回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

## たな 本間家旧本邸別館「お店」(酒田市)



「酒田を代表する観光スポットを2カ所挙げよ」と聞かれたら、多くの人は、山居倉庫と本間家旧本邸を挙げるだろう。そして、「本間家旧本邸」といった場合、それは、「本間家中興の祖」といわれる三代目・光丘が建てた大邸宅を指すことは想像に難くない。しかし、道を隔てた向かいに建つ別館「お店」こそが、本間家のルーツを象徴する建物である。

### 一代で財を成した本間家初代・原光

佐藤三郎著『酒田の本間家』などによると、元禄2(1689)年、本間家初代・原光が「新潟屋」と称して酒田で商売を始めた。現在の「お店」の近くである。この辺りは当時の酒田の“メインストリート”であり、他にも多くの商人がいた。原光は、酒田から米や紅花などを北前船で京(京都)や大坂(大阪)に運び、帰りは薬や反物、金物などさまざまな商品を仕入れて卸売りをしていた。天賦の商才があったのか、商売はと

んとん拍子に進み、5年が経過した元禄7(1694)年には土蔵を建てるまでになった。そして、農民が逃散す



本間家旧本邸HP (<http://hommaka.sakura.ne.jp/>) のトップページに、酒田光陵高校の生徒が作成したHPが紹介されている(本間家旧本邸HPより筆者がトリミング)

ると田地を買い求め、田畑を耕し地主としての基盤も築いていった。また、酒田商人のステータスともいえる三十六人衆にも加えられるようになった。

なお、享保9(1724)年の仕入れ記録では、反物、薬、釜、古手、扇子、夜着、蒲団、綿、仏壇、筆墨、硫黄、白粉、氷砂糖、豊表、紙類などが記されており、まさに当時の百貨店であった。

一代で財を成した原光は、子孫に次の言葉を残している。少し長いが引用しよう。「太平の世に生まれ安んじて家業を営み、父母妻子と生活する皆国君の賜りである。いやしくも資力に余力があれば、分に応じて義を尊び、万分の一でも報じざるをべからず、厚くこれの子孫に訓戒し、時に応じて其志を成さしむ」。これぞまさしく“公益の精神”であり、本間家の根本精神として永く引き継がれていった。

### 本間家は「ただの金持ち」ではない

商売の隆盛で建物はどんどん増改築が進んだが、現在残るのは、明治期に建てられた「お店」の建物のみである。江戸時代から明治、大正、昭和、平成にかけて、激動の時代の中で本間家は商売を続け、「お店」の建物も事務所など用途を変えながらも、いわば“商売の拠点”であった。

そして、平成15年、建物は本間家旧本邸別館「お店」として、観光施設に生まれ変わった。館内には実際に使用された帳場が再現され、行灯等の照明具、台所用品、商売用の看板などを展示している。また、酒田は火事が多かったことから、これに備えて本間家が用意した消火道具なども展示している。実際使えるものも少なくないそうだ。

こうした展示の意義について、スタッフの1人である須藤さんは、「本間家はただの金持ちではなかったことを伝えたい」と話す。例えば、消火道具には本間家の家紋が描かれているが、地域のあちこちに置かれ、火事が起きると地域の男衆が道具を持って消火にあたった。そして、女性たちは大きなお櫃で炊き出しを行った。また、行灯も主に、地域の防犯のための夜回りに使われた。須藤さんは、「本間家は地域とともに歩んできました。いえ、地域に支えられて歩んできたといえるかもしれません。そのことを、いろいろなテーマ、いろいろな形でお客さまに知っていただきたくて、展示の内容を工夫しています」と語ってくれた。

### 地域の魅力を発信する高校生の取り組み

地域との関わり、という意味では、酒田光陵高校の取り組みが目される。同校では、平成26年度に文部科学省からスーパー・プロフェッショナル・ハイスクール(SPH)の指定を受けたことから、情報科の1つの生徒グループが、「地域の魅力発信」をテーマに、本間家旧本邸のホームページ(HP)作成に取り組んだ。もちろん、以前から本間家旧本邸のHPは存在したが、生徒たちは、従来のHPでは伝えきれていない部分をコ

ンテンツに盛り込んだり、スライドショーを盛り込んだりと、さまざまな工夫を行っている。生徒たちが作成したHPは、本間家旧本邸のHPにリンクが張っており、誰でも見ることができる。もちろん、「お店」も紹介されている。活動は先輩から後輩に引き継がれ、現在はスマートフォン向けのHP作成に取り組んでいる。

こうした取り組みについて、同じく、学芸員の星川さんは、「私たちもただ協力するだけではなく、生徒さんと一緒になって、どうしたら魅力あるHPができるか考えています。そして、先輩が残したものを、後輩の感性で改良することで、どんどん内容が良くなっています。活動を契機に初めてここを訪れる生徒さんもあり、地域の魅力を発信するとともに、生徒さん自身にも、地域の魅力を知ってほしいと思います」と評価する。

### 「社員」ではなく「市民」としての思い

もともと、本間家旧本邸が今年、築250年、一般公開から36年目を迎えるのに対し、別館「お店」は江戸時代に建てられた上に、所々改修が行われ、一般公開もようやく15年が経ったところである。それゆえ、本間家旧本邸のパンフレットやHPでも「お店」の扱いは小さい。本間家旧本邸では、訪問客に「別館にもぜひ寄ってください」と勧めているものの、須藤さんも星川さんも、「(『お店』に)いかに集客を図るかは今後の課題」と口を揃える。

しかし、須藤さんは、「会社の社員としてではなく、一人の酒田市民として、本間家の根底にある公益の精神、そして、それを体現するために本間家が何をしてきたのかを、さらに多くの方に知っていただきたいと思います」と力説する。星川さんも、「本間家のことをもっと知っていただくために、今後もこの建物を残していきたい」と言う。

こうした力強い“応援団”に恵まれた歴史的建造物は、実に幸せである。そんなことを考えながら、同館を後にした。(メディア総合研究所主任研究員・山口泰史)



館内に置かれた2つのショーケース。年に7回、本間家所蔵の品々を入れ替え展示する。展示を通してお客さまに何を伝えるか、スタッフの腕の見せ所だ。(筆者撮影)